

僕と彼女とカノジョとかのじよ 1

田尾典文



「プロローグ」

prologue

Bokuto
Kanojoto
Kanojo

バツシヤアアアアアン!! と、けたたましい水音が響く。

古池や 女子飛び込み 入水かな

……なんて、そんな一句を脳裏に浮かべている場合じゃなかった。

「黒恵ちゃん! 大丈夫!?!」

池に落ちてしまったのは暴力的で、粗野で、僕を所有物と言って憚らない僕の幼馴染み。でも、さすがに溺死して欲しいとまでは露程も思っていない。

水面がビックリしたように大きく波紋を広げたが、黒恵ちゃんは未だに池から上がってこなかった。そこまで深い池じゃなかったはずなのに。その上、水泡も浮かんでこない。

直径三十メートル、水深は一メートル強ほどの、ごくごく一般的な公園に作られた、代わり映えのしない池。

「も、もしかして、頭を打ったりとか……?」

不安が過る。もし、そうだとしたら、助けにいかないと黒恵ちゃんが水死してしまう。

咄嗟に池を上から覗き込むが、水面が夕日に照らされて水中はよく見えなかった。その照らされている光は、さらに強く輝くように――。

「って、ええええええええ？」

光量が尋常じゃない。

公園を覆い尽くすような光輝が、爆発的に溢れていく。

温かさを感じさせながらも、その光は周囲を真っ白に染めていく。

だけど、目を瞑らなくても眩しいとは思わない。

すごく不思議な光だった。むしろ、瞳を優しく愛でられている感じだ。

でも、僕はそれ以上に驚くしかなかった。

水面は未だにそのすべてが黄金色に光っていたのだから。

尋常ではない。この光は、夕日の反射なんかじゃないぞ!?

「うふふふふふ、なんか願いとか感じたんですけどー。こんな純粋な願いは久しぶりだねー」

どこからか声が響く。

気付くと、水面の上に薄いドレス――ふわふわのネグリジェのようなものを着込んだ美人さんが立っていた。

美人さんのような気がするのだけど、そんな気がするだけでなぜかその姿は判然とした

い。曖昧すぎる存在が目の前にあった。

体の大きさすらふわふわして定まっていない。服を着ているようだけど、それは水で作られたかのように、形状も常に歪むように変化していた。

あたかも、SFの物語で出てくるような、立体ホログラフィーのよう。

幽霊のようでありながら、とても神々しくて、思わず跪きたくなる気持ちに駆られる。

反面、少し気味が悪くもあった。

「さて、そんな男子」

「は、はい!？」

いきなり話しかけられて、咄嗟に返事をしてしまう。

都市伝説とかで怪異にあった場合、返答しただけでアウトみたいな話があったっけ? いや、うちの町ではそんな危険な都市伝説、聞いたことないけど……。

でも、最悪の事態を思い浮かべてしまい、少し背筋がうすら寒くなった。

「そんな怯えないでいいって。私は女神、願いを叶える者ぞ――なーんて、うふふふふ」

「め、女神、さま……? 願いを叶える?」

「左様」

そこにいる女神を自称した女性は、右手の指をパチンと鳴らす。

すると、池の中から水の音も立てずに、何かが現れた。

そこに現れたのは——ひとりの少女。

池の中に落ちた黒恵ちゃんと同じ制服を着込んだその女の子は、直立姿勢のまま糸に吊されたように浮いている。

あらゆる部位が精巧にできた人形のように——だけど、人間そのものだ。目を瞑っている。けれど——顔が黒恵ちゃんにとてもよく似ている。

大なり小なりの違いはあるけれど、彼女の姉だと言われたら信じてしまいそうだった。区別が付いた大きな理由は髪や眉が艶やかな黒じゃなくて、黄金色を帯びているからだろう。あとは胸が黒恵ちゃんよりも大きくて、とか……。

そんな彼女の雅やかな金髪は、穏やかな風に心地よさそうにたなびいていた。

「おーい、何を呆けてるのー？ こっちも慈善事業じゃないんですよー」

「えっ」

まじまじと見入ってしまったが、一体何が起こってるんだ？

だが、目の前にいる女神さまは混乱する僕に構わず尋ねてくる。

「で。今、落ちたのはこの金髪系女子のオノ？」

「え？ い、いや！ 違います！」

「え、ダメ？ そっかそっか」

女神さまは次に左手の指をパチンと鳴らす。

すると、今度は金髪の女の子のすぐ隣に、またひとりの女の子が浮上する。

金髪の少女と並ぶとかなり小さい。小学生ぐらいの背丈だ。そして、やはりうちの学園の制服を着ていた。

線が細く色白で、触っただけで崩れ落ちてしまいそうな儂さを醸し出している。

この子もまた目を瞑っているけど、やっぱり黒恵ちゃんに顔の作りがよく似ている。

黒恵ちゃんの妹と言われても、違和感がない。

黒恵ちゃんと違うのは身長と、もうひとつ。やはり髪だ。

彼女は、絹のように細い艶やかな銀色の髪を持っていた。それがさらさらと風になびいている。

「では、この銀髪系女子のオノ？」

「ち、違います違います！」

「この子もダメなの？」

少し頭が冷静になってくる。

なんだ、これ。もしかして、イソップ寓話にあった金の斧の話？

女神とか言ってたし。

でも、金の斧の原本ってヘルメス神だった気も……。ここが日本だから、日本ナイズされたのかな？ あー、うち、日本だからさ。横文字の神様禁止なんだよね。マジ？ じゃ

あ、女神にしておくわ、みたいな。

いやいやいや、海外の都市伝説や寓話が御丁寧に日本の絵の具に染まる必要なんて別ないような……。

「あっ！っていうか、黒恵ちゃん！」

現実離れた事態に混乱して、落ちてしまった黒恵ちゃんのことを失念してしまっていた。

「落としたのは、このふたりじゃないのー？」

「え、えっと……落ちた女の子はもっと黒くて……」

「腹が？」

「違いますよ！ 髪がですよ！」

そう答えると、ざばあっ！ と黒恵ちゃんが池から這い出てきた。浮き上がってきたふたりと違って、水が滴っている。

陸に上がった黒恵ちゃんは息を整えるのに必死で、周囲の異常にも気づいていない。

「じゃ、素直なご褒美に黒髪系女子のオノはお返しするとしますよー。金髪系女子のオノと銀髪系女子のオノもついでにあげちゃう」

「は？……え!?」

あげちゃうって……。

「そんじゃねー、少年。やることはやったからあとは頑張ってねー」

そして、女神を自称した女性は、忽然と消えてしまった。

それと同時に世界を覆っていた目映い光も薄くなり、徐々に元の光景を取り戻していく。今まで起こったことが、まるで夢だったかのように元通りだ。周囲にいた僅かな人たちはこちらに注目していたが、それはどちらかと言えば黒恵ちゃんが落ちたことを心配してそのような視線で、女神さまが出ていたことには気付いていないらしい。

池の上に浮いていたはずの金髪と銀髪の女の子たちはというと、いつの間にか僕らの傍へと降り立っていた。

そして、彼女たちの瞳が開く。まるで魂を入れられたかのように。

金髪の子はブルーの瞳、碧眼だ。金髪と相まって、まるで外国人のように見える。夕日に煌めくその瞳は、まるで夜空に浮かぶ星を思わせた。

銀髪の子はグリーンの瞳。北欧に多いというが、これも銀髪に詠えたかのように綺麗だった。芸術品のように映るそれには、不思議と引き込まれるような力がある。

………本当によく似ている。黒恵ちゃんに。

「……………」

「……………」

「……………」

「……げほっげほっ」

黒恵ちゃんが咳き込みながら立ち上がる。そして、状況を把握するようにふたりを交互に見た。

四人で向かい合い、黙ってしまう。

だけど、それも束の間。

金髪の子の表情がパッと花開いた。

「社っ！」

いきなり、僕に抱き付いてくる。体を僕にピッタリとくっつけてきて、しかも頬ずりまでされ始めた。大きな胸の感触までふにょふにょと伝わってくる。

あと、すごくいい匂い。ふわっとした、なんだか安らぐような匂いだ。

「え……あ……」

お、女の子って柔らかい……って、場違いな感想だよ！

「もう我慢することないの！ 社っ！ 大好き、大好き！」

クラツときた。

大好き——こんな魅惑的な言葉だったなんて。

女の子に言われて、こんなに嬉しいなんて。

なんだか天にも昇る気持ちだった。

「って、おいつ！ 誰だか知らねーけど、あたしの社に気安く抱き付くな!!」

黒恵ちゃんの怒声が僕の浮ついた心に冷や水を浴びせた。

ついでに黒恵ちゃんの服に染み込んだ水が飛び散り、物理的にも冷や水を浴びせてくる。この怒声具合は、相当怒っているなあ。池に落ちちゃったし、当然かもだけど……。

「別に社はあなたのものじゃないでしょう、黒恵。だったら、わたしが抱き付いてもノープロブレムよねー！」

「何言ってるんだ。社はあたしのものだっ！ 離れろッ！」

黒恵ちゃんの馬鹿力によって僕たちは引き離された。

穏やかな温もりが消えていく。後ろ髪を引かれるような感覚だけが残った。

「ちょっと何するのよー。社の体温、味わってたのに！」

「うっせーうっせー！ 触れんな触れんな！」

「うわ、何その言葉？ あなたの辞書にはそんなシンプルな単語しか載ってないの？ 可

哀想……」

「あんだよ、お前はあ！ 気持ち悪い顔しやがって！」

ふたりの言い合いは止まらない。

不倶戴天の敵が久しぶりに出会ったみたいいな勢いだ。

「……………」

第一章

1

Bokuto
Kanojoto
Kanojo

「遅いぞ、社！早く来いよ！」

「ま、待ってよ、黒恵ちゃん……」

奴隸という言葉がある。

いい意味で言えば、あるひとつのことに心を奪われ、そのただけに行動する人の喩えだ。

恋の奴隸。

金の奴隸。

探せばいくつかは出てくると思う。辞書にも載ってる。

だが、奴隸という言葉は、概ね悪い意味で捉えられるもの。

『奴隸』

それは人間としての権利・自由を認められず、他人の私有財産の一つとして扱われた人のことを指す。僕の持つてる辞書にはそう印字されてる。

求められるのは、絶対服従。

彼女が主人で、僕が奴隸。

それが僕、神座木社と彼女、小野黒恵の関係だ。

腰まで伸ばした艶やかな黒髪を小さく揺らして、彼女は小さなぬいぐるみコーナーへ向かう。可愛らしいぬいぐるみを物色する目は、まるでナイフを品定めしているかのように鋭く吊り上がっている。今は黒いダツフルコートを着込んでいるから見えないけど、制服も少し改造されている、だから周りの人には不良だと誤解されがちだ。どちらかというと、姉御肌と言った方が正しいけど。

「おっ、これもいいな。買っとこう。ほら、持っとけ」

「あ、うん……」

黒恵ちゃんの投げた小さなぬいぐるみが緩やかな放物線を描いて飛んでくる。

両手で丁寧に掴んで、手に取ったぬいぐるみを右手首に提げている紙袋に入れた。左手首の方に提げている紙袋はご飯を山盛りになされた茶碗みたいになっていてもう入らない。零さないようにバランスを取っている状態だ。

「ナイスキャッチ、社」

「ま、まあ、この距離なら……」

こんなことばかり上手くなっていく。

とても悲しい。虚しくなってくる。自分の境遇にせつなさが炸裂しそうだ。毎日のように、学校帰りに荷物持ち。そして、買い食いや買い物に付き合わされる。今日は百円ショップでご満悦だ。

お金に關してはさすがに取られていないけど、彼女が遊んでいる時、僕に自由な時間はなかった。

「よっし、次行こう！ 次！」

満足したのか、意気揚々と彼女は歩き出す。

僕はそれに静かに付いていくだけだ。機嫌を損ねると夜叉という言葉が生温くなる危険な生物が爆誕してしまう。

「はあ……」

小さく溜息を吐く。

「……どうかしたか、社？」

「いや、なんでもない……」

思えば幼稚園の時から付き合いで、小学校に上がった辺りからヒエラルキーは固まった気がする。

その頃から彼女に振り回され、フォローをして、必死に付いて行って……。幼稚園の頃はそんなでもなかったんだけど、小学生になってから彼女は自分勝手という

か……僕に対して、躰のなつてない犬の飼い主みたいになつてしまったのだ。もちろん躰のなつてない犬扱いされているのは僕だ。

公衆の面前だろうとふたりきりだろうとデコピンされ、罰と称して竹箆をされ、それは年を経るごとにエスカレートしていった。

そんな関係が嫌で、僕は中学の時、心に秘めたる炎を灯した。

黒恵ちゃんと僕の家は近い。歩いて五分もしない。

私立ならともかく、公立に行くのは同じ中学になるのは必然だった。だけど、高校ならば話は変わる。

僕は黒恵ちゃんの理不尽に巻き込まれなかった時間を最大限、有効に活用して猛勉強をした。

県下、公立トップに君臨する尾敷陽光高校に受かるために。

彼女はよく授業をサボっていたし、試験での成績もいいとは言えなかった。

自然、偏差値の低い学校に行くことになる。

彼女がどこの高校に行くかなんてそこまで興味もなかったし、彼女が僕に高校を合わせると言ってきたところで、一般的な学校ならそれを許すはずがない。

僕の進学希望はそのまま通り、それに対しての邪魔もなかった。

僕が尾敷陽光高校を受けると言った時、

「そうかよ」

彼女は顔を逸らして不機嫌そうにそう呟いただけだ。

それから。

僕は尾敷陽光高校を受験し、見事合格。

受験番号を見つけた時は、これまでの理不尽から解放されるのだ、新しい生活が待っているのだ、と涙した。

家が近くと言えど学校での縁がなくなれば、黒恵ちゃんに理不尽な要求をされることも少なくなるだろう。

初めての嬉し涙だった。

そして、入学式。

新しい学校生活に思いを馳せつつスキップを踏みながらウキウキ気分で校門に到着すると、

「よっ、ご機嫌じゃん」

と、笑顔の悪魔が立っていた。黒い翼と尻尾まで見えた。

甘かった。

僕の考えは、砂糖で作った城の如く、甘くて脆くて崩れやすいものだった。

中学三年の夏辺りからちよっかいをかけてこないと思ったら、彼女も僕と同じ高校へ進むべく勉強をしていたらしい。



黒恵ちゃんは普段やらないだけで、本気を出せばすごい女の子だということを僕はすっかり失念していた。中学時代も体育祭では、陸上部の人たちと競ってたぐらいたったからな……。

いくらなんでも、もう勉強のリカバリーは利かないだろうとか、そこまでして僕を奴隷扱いすることはないだろうとか。

そんな常識をパズルのピースのように嵌めていけば、この地獄から抜け出せると思っていたなんて、僕はあまりにも浅はかだった。黒恵ちゃんは、そんな完成した常識のパズルを嬉々として壊す女の子だというのに。

校門で再会した時、本当に僕は顔色を失った。鏡で見たわけではないけど、信号機みたいに赤になったり青になったりしていたと思う。

単に彼女を否定するだけなら、少し遠いけど男子校に進めばよかったのに……。

ただ、男子校って少し怖いような気がして……でも、きつとそれは覚悟が足りなかっただけなのだ。もっと僕は黒恵ちゃんと離れるべく、断固たる決意をするべきだった。

でも、時はすでに遅く。

そして。

僕の奴隷ライフは入学式開始のチャイムと共に再開の鐘を鳴らし――。

あとは、お決まりのパターン。

彼女は僕の自己紹介の時に、『こいつはあたしのもだから、手を出すなよ』と横から口を挟んできて、クラスメイトたちは『へえ、そうなんだ。お幸せに』という雰囲気醸し出した。

そして、今に至る。

「さーて。じゃ、そろそろ帰るか!」

彼女はようやく気が済んだようで、僕たちはようやく帰路につくことになった。

店から出た僕たちは凍えるような寒空の下、人通りの多い繁華街を抜けて、交差点に辿り着いた。青信号が点滅し始めて、早くしないと赤になっちゃう。

僕が走ろうとして――黒恵ちゃんに襟を掴まれた。

「げふっ。く、黒恵ちゃん、首絞まっちゃうよ!」

「しゃーないだろ。むしろ点滅してるのに飛び出す方が危ねえよ!」

……もしかして心配してくれたのだろうか。

いや、黒恵ちゃんは妙に過保護な面を見せるときがあるんだよね。

ここの交差点の点滅は長いのに。こういう風の吹き回しだろう。

「あ、ありがとう!」

「礼なんかいい。慌てて荷物が散乱する方が困るからな。……ほら、青に変わったし、行

くぞ」

しばらく歩いて僕たちは公園に入った。少し大きめの自然公園に吹き抜ける風は肌を凍らせ、すでに葉の散った防風林の枝を寂しげに揺らしていく。そんな霜を貼り付けそうな風が、冬の到来を否応なく感じさせた。

今日も何人かの散歩やウォーキングをしている人などと擦れ違う。声を出して挨拶はしないが、なんとなく会釈した。

それからサイクリングコースを道なりに歩くと、柵に囲われた小さめの池が目に入る。いつもと代わり映えもしない、直径三十メートルほどの池だ。周囲は遊歩道で整備されており、さらにその周りを囲むようにクスノキが植樹されている。柵の内側にも入れるように一部が開いており、その狭いスペースにはベンチもあった。そこは池を眺めながら休める休憩スペースなのだ。

この公園は学校から彼女の家までの近道で、もう十分ほど歩けば彼女の家のただけだ……。

荷物が重くて、腕がキツくなってきた。

足を使って紙袋が少しでも持ちやすくなるよう直す。

「ん？ なんだよ、もう持てないのか？」

その仕草を黒恵ちゃんに見られた。呆れたような視線が刺さる。

「しゃーねーな。そのベンチに下ろしていいぞ」

「ご、ごめん」

言葉に甘えて、僕はデパートや百貨で買ってきた荷物を、黒恵ちゃんが指し示した近くのベンチへと下ろした。

「はあー……」

僕は荷物を下ろしたベンチに座って、背もたれに背を預ける。大きく息を吐くと、寒々しい白い息が目の前で散っていた。

目の前にある池を見ながら背筋を伸ばすと、疲れが少しだけ癒やされる。

「まったく、だらしねえな」

彼女が背もたれの後ろで、溜息を吐いて、呆れたように僕を見た。

「ごめん……」

色々言い訳はできるけど、機嫌を損ねないためにも僕は謝るしかなかった。

いつまで、続くんだろう。この生活……。

「ちゃんとご飯食ってるのかよ」

両肩に手を置いて、僕の肩幅を確かめるように揉んでくる。ちょっと気持ちいい。

「た、食べてるよ」

「三食……？」

「うん」

「だったら、ちゃんと筋トレしろよな」

帰ってからそんな気力が使えるほど残っていないだけだなあ。

学校の授業についていくのが精一杯で勉強漬けだし。

偏差値的にはかなり無理をして今の学校に入学したから、平均を保つだけでもすごくキツかった。ちよつとでも予習復習をサボれば、成績はあつという間に急降下する。

「……つたく。ちよつと飲みもん買ってくる。お前はいつものウーロン茶でいいな？
ちゃんとここで休んでろよ」

彼女は僕から離れ、自販機へと向かった。

「ふう……」

もう一度、白い息と一緒に息を吐く。

結局、彼女がいない時が一番安らぐんだよね。

本当だったら、もっと穏やかな高校生活を送ってた気がするんだけどな。

どこで間違えたんだろう。

でも……。

彼女がいなかったら、もっと不幸になってたような気がするのなぜだろう。

身体も小さいし気も弱いものだから、よくガラの悪い人たちに絡まれていた。それを何

度も何度も黒恵ちゃんは助けてくれる。

『あたしのものに何の用だ』という枕詞まくらごころばいが毎回付いていたけど……。

「少し、風が出てきたなあ……」

池の周りに植樹された木々の枝葉が、その風を非難するように葉音を鳴らしている。

その音は徐々に強くなり、枝も大きくしなった。池の水面にも細波さいなみが広がり始めている。

そして、最後の一吹きとばかりに突風が襲ってきた。肌を突き刺すような寒風が吹き荒れる。

「寒っ」

この季節の風は寒くて嫌いだ。

「社っ！ 荷物！」

怒声が響く。

その声に釣られて見てみれば置いた荷物が倒れそうになっていた。風に煽あおられたのだから。今まさにベンチから落ちようとしていた。

咄嗟とつさに手を伸ばすが、僕の手は届かない。

そこへ、すごい速さで走ってきた黒恵ちゃんが袋を掴つかもうとして——掴めずに、そのまま前へ。

「うああっ!?!」

目の前は、池。

勢いの付いた黒恵ちゃんは止まらない。

僕も止めることができなかった。

バッシヤアアアアン!! とけたたましい水音を響かせて池へと落ちてしまう。ベンチからも袋が落ち、詰め込んでいた荷物が地面に散らばった。

それが黒恵ちゃんが池に落ちるまでの経緯だ。

黒恵ちゃんが池に落ちて。

女神さまが降臨して。

黒恵ちゃんと銀花ちゃんが出てきて。

人生で一度しか起こらないことが三つも起きて、脳内情報の倉庫番がストライキを起しているもんだから、考えも何もまとまらない。

取り敢えず落ち着いて話をするため、あとずぶ濡れになった黒恵ちゃんの服をどうにかするため、四人で黒恵ちゃんの家へとやってきた。

家々が肩を寄せ合うようにしている場所に建つ、二階建ての木造住宅。

外で黒恵ちゃんを待っていると、軋んだ音を立てて玄関が開く。

「ほら、入れよ」

黒恵ちゃんは、ルームウェアのジャージに着替えていた。

僕たちは家上がる。そう言えば黒恵ちゃんの家に来たの久しぶりだな。

今日はまだおじさんもおばさんも帰ってきていないみたいだ。

リビングに通されて、僕はテーブルに着く。

「社の隣はわたしね」

黒恵ちゃんが僕の隣に座って横から抱きしめてくる。わ、悪い気分じゃ決してないんだけど……は、恥ずかしい! 身体の柔らかさとか体温とかが直に伝わってくる。

「は? 社の隣はあたしだ!」

黒恵ちゃんが表情を怒りの朱色に染めて、抱きついている黒恵ちゃんを剥がそうとする。

黒恵ちゃんの手が僕から離れ、黒恵ちゃんは立ち上がらされた。

「……じゃあ……ぎんかが、ここ……」

そんな中、ひっそりと席に上半身を覆い被せて、僕の隣に座ろうとする銀花ちゃん。なかなかしたたかだ。

「駄目に決まってるだろ!」「銀花と言えど、それは駄目よ!」

黒恵ちゃんと黒恵ちゃんが揃って駄目出し。銀花ちゃんが不満そうな表情を作る。



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！